

パレスチナ、イヤーゼロ

作・演出：イナト・ヴァイツマン

“Palestine, Year Zero”

Written and Directed by Einat Weizman

2017.
10.27 Fri - 10.29 Sun

あうるすぽっと
Owlspot Theater



作・演出：イナト・ヴァイツマン
キャスト：ジョー・ジイブラヒム、ガッサーン・アシュカル、アムジャド・バドル、レベッカ・タルハミ
テキスト監修：Eyal Weitzman
翻訳（ヘブライ語・アラビア語）：アブドゥッラフマーン・ナートゥール
舞台監督：タマラ・ハバシュ
ドラマトウルク：アヴネル・ベン・アモス
照明デザイン：アミール・カストロ
照明オペレーター：イヤース・ナートゥール
音楽：スレイマン・ファラジュ
美術・衣裳デザイン：サリーム・シハーデ
字幕オペレーター：ハンナ・ハバシュ
プロデューサー：ナアナア・トゥラウブ

〈東京公演〉
技術監督：實川英司
技術監督助手：河野千鶴
舞台監督：小川浩平
演出部：福澤汐莉
美術コーディネート：中村友美
小道具：小山内ひかり
照明コーディネート：木下尚己（株式会社ファクター）
音響コーディネート：相川 晶（有限会社サウンドウィーズ）
字幕：横尾優美子
翻訳・テクニカル通訳：渡辺真帆
宣伝美術：阿部太一（GOKIGEN）

記録写真：青木 司
記録映像：株式会社彩高堂「西池袋映像」

制作：十万里紀子（フェスティバルトーカー）
制作助手・フロント運営：菅井新菜
インターン：梅村真由、柴 卓然、西 菜津子、西本彩乃、堀越琴乃

プログラム・コーディネート：渡辺真帆

主催：フェスティバルトーカー

Written & Directed by Einat Weizman
Cast: George Ibrahim, Gassan Ashkar, Amjad Badr, Rebecca Telhami
Text Supervision: Eyal Weitzman
Translation: Abedrahman Nator
Stage Manager: Tamara Habash
Dramaturge: Avner Ben-Amos
Lighting Design: Amir Castro
Lighting Operator: Eyas Nator
Music: Suleiman Faraj
Stage & Costume Design: Salim Shehade
Surtitles Operator: Hanna Habash
Producer: Nana Traub

〈Tokyo Production〉
Technical Manager: Eiji Torakawa
Assistant Technical Manager: Chizuru Kouno
Stage Manager: Kohei Ogawa
Stage Assistant: Shiiori Fukuzawa
Stage Design Coordinator: Tomomi Nakamura
Props: Hikari Osanai
Lighting Coordinator: Naoki Kinoshita (Factor Co., Ltd.)
Sound Coordinator: Akira Aikawa (Sound Weeds Inc.)
Surtitles: Yumiko Yokoo
Translator & Technical Interpreter: Maho Watanabe
Publicity Design: Taichi Abe (GOKIGEN)

Photography: Tsukasa Aoki
Video Documentation: SAIKUUDO Co., Ltd.

Production Coordinator: Akiko Juman (Festival/Tokyo)
Production Assistant, Front of House: Niina Sugai
Interns: Mayu Umemura, Zhuoran Rong, Natsuko Nishi, Ayano Nishimoto, Kotono Horikoshi

Program Coordinator: Maho Watanabe

Presented by Festival/Tokyo

フェスティバルトーカー実行委員会
顧問 野村 萬 公益社団法人 日本芸術家演劇団体協議会 会長
能楽部
福原義春 株式会社資生堂 名誉会長
高野千鶴 豊島区長
実行委員長 福越琴乃 公益社団法人新国立劇場運営財団 顧問 アサヒビール株式会社 社友
副実行委員長 市村作知雄 NPO法人アートネットワーク・ジャパン 顧問
フェスティバルトーカーディレクター
小澤弘一 豊島区文化工務部長
東澤 昭 公益財団法人としま未来文化財団 常務理事／事務局長
尾崎元規 公益社団法人企業メセナ協議会 理事長 花王株式会社 顧問
新倉純子 東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科 教授
田中俊宏 株式会社資生堂企業文化部長
鈴木敦子 アサヒビール・アート・ディメンション株式会社CSR部門 ジェネラルマネージャー
鈴木正美 東京商工会議所豊島支部 会長
永井多恵子 公益財団法人せたがや文化財団 理事長
横口友久 豊島区文化工務部文化デザイン課長
岸 正人 公益財団法人としま未来文化財団 劇場開設準備担当課長
蓮池奈緒子 公益財団法人としま未来文化財団
あうるすぽっと（豊島区立舞台芸術交流センター）支配人

米原晶子 NPO法人アートネットワーク・ジャパン 理事長
暁原円花 フェスティバルトーカー 事務局長
河合千佳 フェスティバルトーカー 副ディレクター

監事 佐々木美津子 豊島区総務部総務課長
法務アドバイザー 横井健策 北澤尚登（奇童通り法律事務所）

フェスティバルトーカー実行委員会事務局
ディレクター 市村作知雄
副ディレクター 河合千佳
事務局長 暁原円花
制作 十万里紀子、西川真由子、砂川史織、松宮俊文、三平文乃、横井貴子、武田侑子、岡崎悠実、土田真理、細川浩伸、長田崇史、西宮春香、山縣昌雄、横尾千穂
広報 小倉明紀子、神永真美
経理 堤 久美子
総務 米原晶子、平田幸美
票券 武井和美

技術監督 實川英司
技術監督アシスタント 河野千鶴
照明コーディネート 木下尚己（株式会社ファクター）
音響コーディネート 相川 晶（有限会社サウンドウィーズ）

アートディレクション 氏家啓雄（有限会社氏家プランニングオフィス）
naomi@paris.tokyo
イラスト 竹下雅哉（有限会社氏家プランニングオフィス）
ブックレット 降旗 剛（FLA&S）
当日パンフレット 小林 剛（UNA）
海外広報・翻訳 ウィリアム・アンドリュース
演説 渡辺 淳
演目紹介執筆 鈴木理映子
プログラム・コーディネート 横越 悠彦
中国プログラム・コーディネート 小山ひとみ
ウェブマガジン編集 島貫泰介

インターン
石川 優、井上 渚、岩井美菜子、薄井理美、梅村真由、柴 卓然、方瀬りっか、北村沙里、工藤 伶、栗山なつみ、クシナレ実、土田真菜、呉 芳雄、小林礼乃、小林春菜、薄みずき、鶴田真菜、寺田 凛、西 菜津子、西本彩乃、野村明日香、堀越琴子、野本ひとみ、橋本 葵、林美沙希、堀越琴乃、宮岡夏希、村上瑠美、山本菜奈、山本菜穂、横見咲季

スペシャルサンクス FITサポーターのみなさま

主催 フェスティバルトーカー実行委員会
豊島区／公益財団法人としま未来文化財団／NPO法人アートネットワーク・ジャパン、
アーツカウンシル東京・東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団）

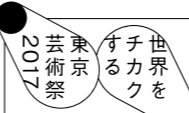
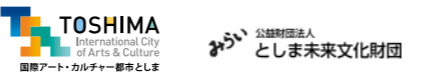
オープニングプログラム共催 国際交流基金アジアセンター
協賛 アサヒグループホールディングス株式会社、株式会社資生堂
後援 外務省、公益社団法人日本芸術家演劇団体協議会、I-WAVE 81.3 FM
特別協力 西武池袋本店、東武百貨店池袋店、東武鉄道株式会社

協力 株式会社サンシャインシティ、チャコット株式会社、株式会社ヒューマックスシネマ
東京商工会議所豊島支部、豊島区商店街連合会、豊島区可会連合会、
一般社団法人豊島区観光協会、一般社団法人豊島産業協会、
公益社団法人豊島法人会、池袋西口商店街連合会、
特定非営利活動法人ゼファー池袋まちづくり、池袋西口公園活用協議会、
南池袋公園をよくなる会、セサルトマトロボリタツ、
ホテル グランドシティ、池袋ホテルコム
宣伝協力 株式会社ポスターハリス・カンパニー、
早稲田大学坪内博士記念演劇博物館、アップリンク

平成29年度 文化庁 文化芸術創造活用プラットフォーム形成事業
（池袋/としま/東京アーツプロジェクト事業、としま国際アートフェスティバル事業）



会期 2017（平成29）年9月30日（土）～11月12日（日）



tokyo-festival.jp

Festival/Tokyo Executive Committee
Advisors: Man Nomura (Chair, Japan Council of Performers Rights & Performing Arts Organizations; Noh actor) Yoshiharu Fukuhara (Honorary Chair, Shiseido Co., Ltd.)

Honorary President of the Executive Committee: Yukio Takano (Mayor of Toshima City)

Chair of the Executive Committee: Shigeo Fukuchi (Advisor, New National Theatre Foundation, Senior Alumnus, Asahi Brewers Inc.)

Vice Chairs of the Executive Committee: Sachio Ichimura (Advisor, NPO Arts Network Japan; Director, Festival/Tokyo) Kaichi Ozawa (Director, Culture, Commerce and Industry Division, Toshima City) Akira Tazawa (Secretary, Toshima Future Culture Foundation)

Committee Members: Motoki Ozaki (President, Association for Corporate Support of the Arts; Corporate Advisor, Kao Corporation) Sumiko Kumakura (Professor, Department of Musical Creativity and the Environment, Tokyo University of the Arts) Toshihiro Tanaka (General Manager, Corporate Culture Department, Shiseido Co., Ltd.) Atsuko Suzuki (General Manager, Corporate Social Responsibility Section, Asahi Group Holdings, Ltd.) Masami Suzuki (Chair, Tokyo Chamber of Commerce and Industry Toshima) Taeko Nagai (Chair, Setagaya Arts Foundation) Tomohisa Higuchi (Director, Cultural Design Section, Culture, Commerce and Industry Division, Toshima City) Masato Kishi (Manager, New Theater Opening Preparation Room, Toshima Mirai Culture Foundation) Naoko Hasuike (Toshima Mirai Culture Foundation; Executive Director, Owlspot Theater) Akiko Yonehara (Representative, NPO Arts Network Japan) Madoka Ashihara (Administrative Director, Festival/Tokyo) Chika Kawai (Vice Director, Festival/Tokyo)

Supervisor: Mitsuko Sasaki (Director, General Affairs Section, General Affairs Division, Toshima City)
Legal Advisors: Kensaku Fukui, Hisato Kitazawa (Ketto Dori Law Office)

Festival/Tokyo Executive Committee Secretariat
Director: Sachio Ichimura
Vice Director: Chika Kawai
Administrative Director: Madoka Ashihara
Production Coordinators: Akiko Juman, Mayuko Arakawa, Shiori Sunagawa, Toshifumi Matsumiya, Ayano Misan, Takako Yokoi, Yoko Takeda, Yumiko Okazaki, Ysuri Fujii, Hironobu Hosokawa, Takashi Osada, Shogo Shinomiya, Masao Yamagata, Chihō Yokoo

Public Relations: Akiko Ogura, Mami Kaminaga
Accounting: Kumiko Tsutsumi
Administrator: Akiko Yonehara, Saki Hirata
Ticket Administration: Kazumi Takei

Technical Director: Eiji Torakawa
Assistant Technical Director: Chizuru Kouno
Lighting Coordination: Naoki Kinoshita (Factor Co., Ltd.)
Sound Coordination: Akira Aikawa (Sound Weeds Inc.)

Art Direction: Yoshio Ujije (Ujije planning office)
Illustrations: naom@paris.tokyo
Website: Masaya Takeshita (Ujije planning office)
Booklet Design: Takeshi Furihata (FLA&S)
Program Design: Takeshi Kobayashi (UNA)
Overseas Public Relations, Translation: William Andrews
Merchandise: Jun Watanabe
Japanese Writing (Production Pages): Rieko Suzuki
Program Coordinator: Masahiko Yokobori
Chinese Program Coordinator: Hitomi Oyama
Online Magazine Editor: Taisuke Shimamuki

Interns: Yu Ishikawa, Nagisa Inoue, Minako Iwai, Satomi Usui, Mayu Umemura, Rong Zhuoran, Rikka Katase, Shiori Kitamura, Rei Kudo, Natsumi Kuriyama, Sara Gunnare, Mana Kamioka, Hoen Go, Ayano Kobayashi, Haruna Kobayashi, Mizuki Sawa, Mana Tsuruta, Rin Terada, Natsuko Nishi, Ayano Nishimoto, Asuka Noguchi, Tamako Noto, Hitomi Nomoto, Aoi Hashimoto, Misaki Hayashi, Kotono Horikoshi, Natsuki Miyazaki, Emi Murakami, Ayano Yamamoto, Mai Yamamoto, Saki Yokomi

Special thanks to the FIT Volunteer Supporters

Organizers: Festival/Tokyo Executive Committee, Toshima City, Toshima Future Culture Foundation, NPO Arts Network Japan (NPO-ANJ), Arts Council Tokyo & Tokyo Metropolitan Theatre (Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture)
Opening production co-organized by the Japan Foundation Asia Center
Sponsored by Asahi Group Holdings, Ltd., Shiseido Co., Ltd.
Endorsed by Ministry of Foreign Affairs, GEDANKYO, J-WAVE 81.3 FM
Special cooperation from SEIBU IKBEBUKUROHONTEN, TOBU DEPARTMENT STORE IKBEBUKURO, TOBU RAILWAY CO., LTD., Sunshine City Corporation, Chacott Co., Ltd., HUMAX CINEMA INC.
In cooperation with Tokyo Chamber of Commerce and Industry Toshima, Toshima City Shopping Street Federation, Toshima City Federation, Toshima City Tourism Association, Toshima Industry Association, Toshima Corporation Association, Ikebukuro Nishiguchi Shopping Street Federation, NPO Zephyr, Ikebukuro West Gate Park Management, Neighborhood of the Minami Ikebukuro Park, Hotel Metropolitan Tokyo, Hotel Grand City, Ikebukuro Hotel Association
PR Support: Poster Hari's Company, Waseda University Tsuibouchi Memorial Theatre Museum, UPLINK

Supported by the Agency for Cultural Affairs, Government of Japan in the fiscal 2017

Period: September 30th (Sat) to November 12th (Sun) , 2017

編集・発行:フェスティバルトーカー実行委員会事務局 〒171-0031 東京都豊島区目白5-24-12 旧真和中学校4F TEL：03-5961-5202 http://www.festival-tokyo.jp/



FT Festival//Tokyo

日本初演によせて

『パレスチナ、イヤーゼロ』は、ナクバ:イスラエルによるパレスチナ人の大量追放、剥奪、離散を、現在進行形の出来事として描き出す作品です。アラビア語で「大惨事」を意味するナクバは、1948年、イスラエル建国により約70万人のパレスチナ人が故郷から根こそぎにされ、今日まで未解決の難民問題を生み出したことに端を発します。この作品は、イスラエルが様々な口実の下で継続的にパレスチナ人の家屋を破壊している例を用い、大惨事は1948年に終わらず、その反響や残響が非常に現在的であるということを示します。

イスラエルがパレスチナ人に惨事をもたらし続けている方法は多様です。個人の家を壊すことで土地から出て行かせ、民族的郷土の崩壊を深めています。

イスラエル人の間で、パレスチナのナクバが語られることはありません。ナクバの歴史と現在に続く問題はしきりに抑え込まれています。この作品は、抑え込まれた現実に芸術的表現を与えることで、意識の周縁から舞台の中心に乗せようとする試みです。日本の観客に届けられることを嬉しく思います。

イナト・ヴァイツマン

『パレスチナ、イヤーゼロ』の舞台。パレスチナ人の家屋を破壊するイスラエル軍の兵士たち。

『パレスチナ、イヤーゼロ』を初めて読んだとき、豊かな創作の素材だと思いました。作品が扱うのは、イスラエル国家によるパレスチナ人とその資産に対する違法行為。イスラエルは長年にわたり、様々な口実を使って数千のパレスチナ人の家を壊してきました。村々をまるごと消し、そこにイスラエルの入植地を建てました。作品にはジェニンとガザでの戦争と破壊、(エルサレムの)ユダヤ化、ユダヤの遺跡を探す名目で行われる家屋破壊も登場します。

数々の事例を読むうちに、過去の感情や記憶が呼び起こされました。1948年、家族と一緒に出身地ラムレから追われた日のこと。自宅から追い出され、難敵民となった数十万人のパレスチナ人と同様に、私たちはヨルダンで難民として暮らしました。この作品を通じ、私は自分自身の物語を世界に発します。

ジョージ・イブラヒム

ジョージ・イブラヒム

(訳:渡辺真帆)

廃墟の上に廃墟を積み重ねて

岡 真理

(現代アラブ文学研究者、京都大学大学院人間・環境学研究科教授)

『パレスチナ、イヤーゼロ』の舞台。パレスチナ人の家屋を破壊するイスラエル軍の兵士たち。

2002年4月、第2次インティファード(イスラエルの占領に対する占領下民衆の抵抗運動)は最高潮に達していた。武装抵抗勢力の拠点だった、ヨルダン川西岸北部にあるジェニン難民キャンプにはイスラエル軍が侵攻し、激烈な戦闘の末、キャンプは徹底的に破壊された。

私がキャンプに入ったのは、イスラエル軍が撤退して1週間後のことだった。3階建て、4階建ての家が隙間なくひしめいていたはずのキャンプ中央部は、百数十メートル四方にわたり土砂の海と化していた。その海の周囲を、全壊は免れたものの、壁の一面が崩れ落ちた家や、壁に大きな亀裂が入った家々がいびつに縁取っていた。日除け代わりに張られた毛布の下で男たちが3人、無言で座って虚空を眺めていた。3階建ての自宅があったのだというそこには、土砂と、かつて家財道具であったものの残骸がただ堆積しているだけだった。

『パレスチナ、イヤーゼロ』の舞台。パレスチナ人の家屋を破壊するイスラエル軍の兵士たち。

本作『パレスチナ、イヤーゼロ』は、パレスチナでパレスチナ人が被るさまざまな家屋破壊の証言によって構成されている。私が訪れた第2次インティファードのころのジェニン難民キャンプも登場する。キャンプの路地や家の窓、玄関といった、人間が通るとされるところには待ち伏せや爆発物が仕掛けられている危険がある。だからキャン

『パレスチナ、イヤーゼロ』の舞台。パレスチナ人の家屋を破壊するイスラエル軍の兵士たち。

イナト・ヴァイツマン **Einat Weizman**

女優、劇作家、演出家、人権活動家。1973年ハイファ生まれ。アメリカやイギリスなどで演技を学んだ後、テルアビブ大学で映像や政治学も専攻。映画、TV、演劇の主演俳優として名を馳せる一方、過去には政治・社会に関わるコラムニストとしても活動した。近年は演出・劇作家として、イスラエルの占領政策を批判するラディカルな作品を制作する。
主な作・演出作品に『Shame』(2015)、『The 112 house: A Lesson in Political Construction』(17)。

ジョージ・イブラヒム **George Ibrahim**

俳優、アルカサバ・シアター&シネマテーク創設者、ディレクター。1945年生まれ。俳優としてのキャリアを積み、ヘブライ大学で演劇を学んだ後、劇作家、演出家としても活躍。代表作に『Ramzi Abu Al Majd』(95・カルタゴ国際演劇祭ベスト俳優賞)、『Immigrant』(99・カルタゴ国際演劇祭ベスト演出家賞及びベスト衣裳賞)など。本作でもアッコ演劇祭ベストパフォーマー賞を受賞している。『アラブ・フロム・パレスチナ-占領下の物語-』(2004・11)、『壁-占領下の物語II』(05)のほか、演出家・坂田ゆかりら日本のアーティストと共同制作した『羅生門』藪の中』(F114)でも来日している。

プに侵攻したイスラエルの兵士たちは、肩を寄せ合うように立ち並ぶ難民たちの家の壁を壊して押し入り、さらに壁をぶち壊しながら進んでいく。

あるいは、エルサレム旧市街の外れにあるアラブ人の村、シルワーン。地下に「ダビデの街」の遺跡があるとされ、その発掘のために村の家々が現在進行形で破壊されている。

非戦闘員に対する無差別攻撃は国際法違反だが、第2次インティファードさなかのガザでは、イスラエルは一人の標的を殺害するためにミサイルを撃ち込む。その巻き添えとなって周囲の家々が破壊され、瓦礫の下敷きになって人々が殺される。第2次インティファードではパレスチナ側の武装抵抗も熾烈を極め、イスラエル領内での自爆や自殺攻撃が相次いだ。その報復として、実行犯の出身の街や村にイスラエル軍が侵攻し、集団懲罰もまた国際法で禁じられているにもかかわらず、実行犯の自宅を爆破する。パレスチナは大家族だ。家族全員が一夜にして家を失う。

1967年、イスラエルは東エルサレムを含むヨルダン川西岸地区とガザを占領。その後、東エルサレムを併合し、恒久首都化宣言をする。エルサレムと西岸は切り離され、西岸の住民はエルサレムに居住することが認められないため、エルサレムと西岸地区の境界線の上に建つ家は、西岸側の自宅の半分を取り壊される。

『パレスチナ、イヤーゼロ』の舞台。パレスチナ人の家屋を破壊するイスラエル軍の兵士たち。

数年ごとにイスラエルの大規模軍事攻撃に見舞われるガザ。とりわけ3年前の夏は51日間にもわたりジェノサイド攻撃とも言うべき殺戮と破壊にさらされた。イスラエルとの境界線沿いに位置する街区がごとごとく猛爆され、巨大津波に襲われた被災地のように、一帯は瓦礫の海となった。南部のフザーア地区もその一つだ。地上軍が憂いなく侵攻できるように、ひとつの街区全体がまるまる破壊されたのだった。

あの夏の攻撃では、ガザの全人口200万のうち、最大時には50万人が家を追われた。非戦闘員に対する無差別攻撃だが、イスラエルは、事前に通告し避難勧告しているから戦争犯罪ではないと嘯く。しかし、その通告とは突然かかってくる録音電話——「10分後にその地区を攻撃するから避難しなさい」、あるいはミサイルで「屋根を叩く」というものだ(その「ノック」で死傷する者もいる)。10分で行ったい何ができるだろう。一瞬にしてその街区に住む数百人が難民となる。70年前、故郷を追われ、難民となってガザにやって来た者たちが、ふたたび家を追われる……。

家が破壊される理由はさまざまだが、軍、行政、司法



『パレスチナ、イヤーゼロ』の舞台。パレスチナ人の家屋を破壊するイスラエル軍の兵士たち。

が一丸となって、パレスチナ人の住まいを破壊していることが分かる。それは70年前から変わらない、イスラエルの一貫した対パレスチナ政策だ。

『パレスチナ、イヤーゼロ』の舞台。パレスチナ人の家屋を破壊するイスラエル軍の兵士たち。

1947年11月、国連総会は、ナチスによるジェノサイドを生き延びたものの帰るところも行く当てもない25万人ものヨーロッパ・ユダヤ人難民の問題を解決するために、パレスチナを分割し、そこにユダヤ国家を建設することを賛成多数で可決、翌1948年、パレスチナの地にイスラエルが建国された。だが、「ユダヤ民族の栄光の瞬間」とシオニズムが言祝ぐその建国は、その地に住まうパレスチナ人70万余を民族浄化するという暴力の上に実現したものだ。70年前、パレスチナ人を襲ったこの民族浄化の悲劇をアラビア語で「ナクバ」という。「大いなる破局グレート・カタストロフ」という意味だ。

作中、幾度かこの「ナクバ」という言葉が役者たちの口から発せられる、「終わらないナクバ」「現在進行中のナクバ」として。そう、ナクバは終わっていない。パレスチナ人はこの70年間ずっと、形を変えて継続するナクバ／カタストロフを生き続けている。いや、本作の脚本家であり演出家のイナト・ヴァイツマンがイスラエルのユダヤ人であることを踏まえるなら、むしろこう言うべきだろう、**イスラエル**はその建国以来70年間ずっと、パレスチナ人に対して止むことなく民族浄化の暴力を行使し続けているのだと。「家屋破壊」という現象に焦点を当てつつ、本作が描くのは、まさにそのこと——継続する民族浄化という歴史的暴力——である。

だから、ナクバで家を追放され、帰還を認められない挙句に、パレスチナに彼らが存在したという事実そのものを否定される者たちも登場するのだ(歴史的な存在の記憶それ自体を否定すること——メモリスайд(記憶の扼殺)——とは「民族浄化」を構成する一要件であると、イスラエル出身のユダヤ人の歴史家、イラン・パベはその著書『パレスチナの民族浄化』(法政大学出版

局)で述べている)。本作のラストが、鑑定士を演じる主演のジョルジ・イブラヒム自身の身に起きた出来事として、1948年のナクバにおけるラムレからの追放とそこへの「帰還」の証言で締めくくられるのもそのためだ。イブラヒムの故郷ラムレへの「帰還」は皮肉にも、娘の逮捕・収監という新たな家の破壊によって実現する。ここにおいて円環が閉じ、家の破壊が70年続く歴史的暴力にほかならないことが描かれる。

家屋破壊とは物理的に家を破壊されるだけではない。人間にとってそれは家庭の破壊であり家を失うことだ。1948年のナクバとは、パレスチナ人にとって故郷の破壊であり、その喪失にほかならなかったが、本作は、エルサレムで、西岸で、ガザで、イスラエル領内で、パレスチナ人を今なお見舞う家屋破壊という出来事を通して、パレスチナ人の民族浄化という歴史的暴力が70年間一貫して彼らの身に振るわれ続けている事実を告発する。「グラウンド・ゼロ」が「爆心地」という、巨大な暴力の起点となるトポスを意味するならば、「パレスチナ零年」というシニフィアンが指示するのは、暴力の起点となる時そのもの、すなわち1948年のナクバである。1948年のイスラエル建国にともなう民族浄化、それこそが今に続くすべての暴力の起源であるとタイトルは示唆する。昨年、イスラエルの文化大臣が「国家の根幹を揺るがす」としてアッコ演劇祭における本作の上演中止を脊髄反射的に要求したのも(彼女はそのとき脚本すら読んでいなかった)、タイトルに込められたそのメッセージを的確に理解したからだと言える。

『パレスチナ、イヤーゼロ』の舞台。パレスチナ人の家屋を破壊するイスラエル軍の兵士たち。

イスラエルにおいてパレスチナ人のナクバの記憶は、ナショナル・ヒストリーというセメントによって徹底的に塗り固め、抑圧しなければならない「汚辱の歴史」である(日本におけるアジア侵略の記憶、旧日本軍性奴隷制の記憶のように)。だから、イスラエルの「独立記念日」(パレスチナ人にとっては民族の悲劇を悼むナクバ記念日だ)にナクバを公に追悼することがイスラエルでは法的に禁じられ、また、パレスチナ人のナクバの記憶にしっかりと向きあい、それを自分たちの加害の記憶としてイスラエルの歴史に深く刻もうとするユダヤ系市民たちの心ある営みも、政府によって妨害される。ユダヤ人であるヴァイツマンによってイスラエルの人々に向けて作られた本作が、イスラエル社会の中でいかにラディカルな作品かうかがい知れるだろう。

『パレスチナ、イヤーゼロ』の舞台。パレスチナ人の家屋を破壊するイスラエル軍の兵士たち。

物語が進行するほどに舞台中央に堆積していく瓦礫は、イスラエル建国以来今日まで破壊され続けるパレス



『パレスチナ、イヤーゼロ』の舞台。パレスチナ人の家屋を破壊するイスラエル軍の兵士たち。

チナ人の家の換喩であり、また、「家」によって象徴される彼らの暮らしや人間としての生それ自体の破壊の隠喩的な表現だが、同時にそこには、ヴァルター・ベンヤミンが「歴史の概念について」で描いた、逆風に煽られながら「歴史の天使」が大きく見開いたその瞳で凝視する「廃墟の上に積み重ねられた廃墟」のイメージが重ねられてもいよう。ベンヤミンの「歴史の天使」のイメージを引用しながらヴァイツマンは、「美しいイスラエル」とは実はあの瓦礫の山、無残な残骸にほかならないことを描いている。凱旋喇叭を高らかに吹き鳴らしながら練り歩く「勝者」という名の盗人たちが、その傍らに高々と築いてゆく記念碑としての瓦礫の山。そして、歴史という名のカタストロフ——。

ヴァイツマンの新作『占領の囚人たち』は、アッコ市当局の介入により今年のアッコ演劇祭での上演を禁じられた。3年前のガザ攻撃の際、右派は「アラブ人に死を、左翼に死を」と、攻撃に反対する「非国民」にも憎しみを滾らせたが、一貫してパレスチナ人に対する自国の政策に異議を唱え続ける彼女は、これら「愛国者」による日常的な脅迫にさらされてもいる。本作は、思想・信条の自由、表現の自由が官民の双方から抑圧される社会で、国家の検閲に抗し、自己検閲に抗し、「表現者」であることを貫こうとする一演劇人の意志によって創造されていることを強調したい。

『パレスチナ、イヤーゼロ』の舞台。パレスチナ人の家屋を破壊するイスラエル軍の兵士たち。

『パレスチナ、イヤーゼロ』の舞台。パレスチナ人の家屋を破壊するイスラエル軍の兵士たち。

『パレスチナ、イヤーゼロ』の舞台。パレスチナ人の家屋を破壊するイスラエル軍の兵士たち。

『パレスチナ、イヤーゼロ』の舞台。パレスチナ人の家屋を破壊するイスラエル軍の兵士たち。

岡 真理
1960年、東京生まれ。現代アラブ文学研究者、京都大学大学院人間・環境学研究科教授。パレスチナ難民をはじめ、種々の構造のなかでサバルタン化される者たちの生の経験を描いた文学作品を通して、パレスチナ問題や第三世界の女性たちの問題を現代世界に生きる人間の思想的課題として考察する。著書に「アラブ折りとしての文学」(みすず書房、2008)、『榊椰子の木陰で 第三世界フェミニズムと文学の力』(青土社、06)ほか。